

ボーランド国立アウシュヴィツ・ビルケナウ博物館の現象学

寺田匡宏

島尾敏雄の記述によるナショナル・メモリリーの論述

An Analysis of Auschwitz Museum Viewed from the Standpoint of Phenomenological Museum Anthropology : The Case of Toshio Shimao

はじめに—問題の所在

- ①アウシュヴィツに行きました
- ②アウシュヴィツで
- ③アウシュヴィツ・ミュージアムの現象学
おわりに

[論文構成]

本稿は、ボーランド国立アウシュヴィツ・ビルケナウ収容所ミュージアムの展示について博物館人類学的に研究するものである。

同館はいうまでもなく、第二次世界大戦中のナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅計画実施の舞台となつたところであり、強制・絶滅収容所がそのままミュージアムに転用されている特異な場所である。そのような場所における展示のあり方を検討する上で、災厄の記憶の博物館展示のあり方に關する示唆を得る」とができると考へる。島尾敏雄も日本の戦後文学の中で独特の位置を占めている。魚雷艇特攻隊長として戦争に参加した経験を持ち、その経験を表現することを文学活動の一つの柱としてもた。その島尾がボーランドにおもむき、アウシュヴィツを訪ねてインテンシブな記述

を行つてゐる。記述の特色を検討することでアウシュヴィツ・ミュージアムの展示の特性を理解することができる。

一章では島尾がアウシュヴィツに行つまでの経緯をまとめた。

二章では島尾のアウシュヴィツでの記述を詳細に検討した。

三章では島尾のアウシュヴィツでの記述を現象学的博物館人類学の視点からと評価できるのかを見た。
以上を通じて、アウシュヴィツ・ミュージアムの展示を島尾敏雄がどのように受けとめたのかが明らかになり、同時にアウシュヴィツ・ミュージアムの展示の特性も浮かび上がつたと考えている。